



認知症と口腔機能研究会第7回学術集会 プログラム・抄録集

テーマ：認知症・高齢者・口腔機能に関連する最新知見

日程：2026年8月29日（土）13:55～、30日（日）9:30～16:15

会場：九州大学歯学部学生講義棟 1F 講義室 AB

共催：（公社）日本補綴歯科学会

集会長：鮎川保則

副集会長：兼松 隆、熱田 生

実行委員長：荻野洋一郎

事務局 学会ホームページ：<http://www.jrsdof.com>

E-mail：office@jrsdof.net

第7回学術集会長挨拶



九州大学大学院歯学研究院口腔機能修復学講座
インプラント義歯補綴学補綴学分野
鮎川保則

この度、認知症と口腔機能研究会（JRSDOF）第7回学術集会を2026年8月29日（土）、30日（日）の2日間、九州大学大学院歯学研究院におきまして対面とWebのハイブリッド形式で開催させていただきます。今回の学術集会は、「認知症・高齢者・口腔機能に関連する最新知見」をメインテーマとし、基礎研究、臨床研究で著名な先生方に加えて、地域の医療現場で活躍されている先生方を講師にお迎えすることとなりました。

集会1日目には、豊田博紀先生（愛知学院大学）、柏崎晴彦先生（九州大学）、竹下徹先生（九州大学）にご登壇いただき、先生方の研究から示された最新知見をご講演いただきます。また「認知症セミナー」として精神科医の内田直樹先生に「認知症診療の基礎知識と、最新知見について」というタイトルでご講演いただきます。

集会2日目には、訪問診療をメインに地域医療でご活躍されている三輪俊太先生、中尾祐先生に臨床ステップアップセミナーを行います。教育講演には、久山町研究でご高名な二宮利治先生（九州大学大学院医学研究院衛生・公衆衛生学分野）にご登壇いただき、「認知症予防における食事および歯科・口腔ケアの重要性：久山町研究の成績を中心に」というタイトルで認知症予防における食生活と歯科・口腔ケアの重要性についてご講演いただきます。ランチョンセミナー（アース製薬）、一般口演（3題）ののちに「特別セミナー」としまして後藤哲哉先生（鹿児島大学）と佐治直樹先生（国立長寿医療研究センター）には認知症に関する内容を中心にご講演いただきます。

以上のように、各分野の最前線でご活躍の先生方にご登壇いただく本集会も、これまで同様に充実した内容となっております。講師の皆様、そしてご参加いただく皆様とともに、夏の暑さを吹き飛ばすような活発な議論を行えることを心より楽しみにしております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

会場案内

九州大学歯学部 学生講義棟 1F 講義室 AB

(馬出九大病院キャンパス：右下図のモニュメントのある建物です。)

〒812-8582 福岡市東区馬出 3-1-1

JR 吉塚駅（県庁口） / 徒歩 10 分

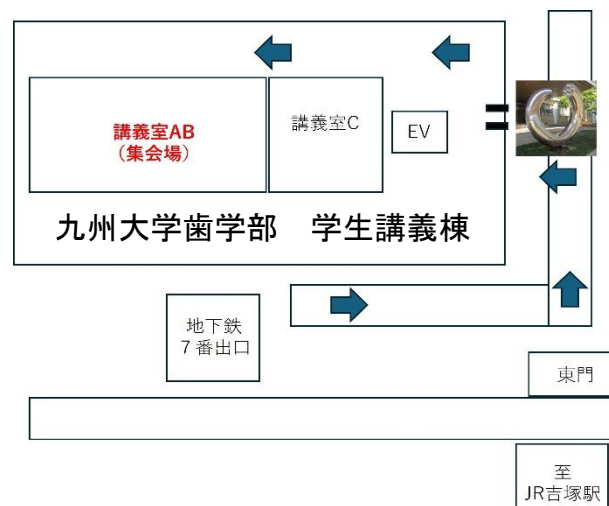


福岡市営地下鉄 2 号線「馬出九大病院前」駅（7 番出口すぐ）



キャンパス内

モニュメントそばの入口
より入館ください。



タイムテーブル

1日目 8月29日 (土)

13:00 世話人会

13:55 開会式

基礎・臨床研究セッション

14:00 招待講演① (40+5) 豊田博紀先生
(愛知学院大学)

14:50 招待講演② (40+5) 柏崎晴彦先生
(九州大学)

15:40 招待講演③ (40+5) 竹下 徹先生
(九州大学)

座長：兼松 隆先生

16:30 認知症セミナー (80+10)

内田直樹先生 (たろうクリニック)

座長：萩野洋一郎先生

18:30 情報交換会

※各セッション間に休憩を予定しています。

2日目 8月30日 (日)

臨床ステップアップセミナー

9:30 講演① (35+5) 三輪俊太先生
(Ihana訪問歯科グループ)

10:10 講演② (35+5) 中尾 祐先生
(別府歯科医院)

座長：會田英紀先生

11:00 教育講演 (60+10)

二宮利治先生 (九州大学)

座長：鮎川保則先生

12:20 ランチョンセミナー (60)

アース製薬株式会社 共催

鮎川保則先生 (九州大学)

一般口演 (12+3)

13:30 O-1 林 瑤一郎先生 (神奈川歯科大学)

13:45 O-2 関 貴良史先生 (福岡歯科大学)

14:00 O-3 吉村 弘先生 (徳島大学)

14:15 O-4 戸澤聖也先生 (鹿児島大学病院)

座長：熱田 生先生

特別セミナー

14:40 講演① (35+5) 後藤哲哉先生
(鹿児島大学)

15:20 講演② (35+5) 佐治直樹先生
(長寿医療研究センター)

座長：若森 実先生

16:05 閉会式

司会・挨拶：鮎川保則先生／次期大会長

学術集会参加者の皆様へ

I 参加方法

- 1 年会費入金をもって参加登録とさせていただきます。運営事務局にて年会費の支払い確認後に、8月29日、30日 Zoom ID とパスコード、領収書付き参加証をメールにて送付します。なお、Zoom ID とパスコードは1日目と2日目それぞれに設定されています。 ※ 未入金の方は、学術集会当日に、受付にて年会費のお支払いをお願いします。 ※ オンデマンド配信は行いません。
- 2 現地にてご参加の先生方には、誠に恐縮ですが、ご自身にて参加証を印刷、ご記名の上、ご持参ください。ネームカードホルダーは、会場に用意しております。
- 3 本学術集会ではクールビズを推奨しています。現地にてご参加の際は、ノーネクタイ・スマートカジュアルにてお越しください。皆様のご理解ご協力をよろしくお願いいたします。
- 4 WEBにてご参加の先生方には、以下についてご協力をお願い申し上げます。
 - 1) ご入室の際には、「お名前（ご所属）」で表示し、マイク（音声）はミュートに設定してください。
 - 2) 演者へのご質問・ご意見は、「チャット」機能をご利用ください。
 - 3) 画面の撮影・録音等は固くお断りいたします。

II. 情報交換会（事前申込みのみ）

日 時： 8月29日（土）18：30 ～

会 場： 御膳屋 菴離（中洲川端駅（川端側出口）直結、博多座 地下2階）

会 費： 8,000 円（当日支払，領収書は会場でお渡しいたします。）

1日目 8月29日(土) 基礎・臨床研究セッション
座長 兼松 隆 (九州大学)

14:00-16:25

招待講演① 14:00-14:45

ストレスによる青斑核ニューロンの自己抑制破綻機構のアルツハイマー病への関与

Stress-induced impairment of autoinhibition in locus coeruleus neurons and its involvement in inducing Alzheimer's disease

○豊田博紀¹、姜 英男²

○Hiroki Toyoda¹, Youngnam Kang²

¹愛知学院大学歯学部生理学講座

²大阪大学大学院人間科学研究科動行動生理学分野

¹Department of Physiology, School of Dentistry, Aichi Gakuin University,

²Department of Behavioral Physiology, Osaka University Graduate School of Human Sciences.

アルツハイマー病は、青斑核(LC)ニューロンにおいて細胞質ノルアドレナリン代謝物 DOPEGAL がタウ変性を誘導することで発症すると考えられているが、細胞質における DOPEGAL 増加の機序は不明であった。我々は、慢性ストレスがLCニューロンの $\alpha 2A$ 受容体の内在化を誘導し、GIRKチャネルを介した自己抑制機構を破綻させることを明らかにした。この破綻はLCニューロンの過剰興奮と細胞内Ca²⁺濃度上昇を招き、MAO-A活性を高めてDOPEGAL産生を促進する。その結果、AEP活性化を介したタウ断片化と記憶障害が誘導されることを示した。一方、三叉神経中脳路核(MTN)由来のNT-3はLCニューロンの細胞死を抑制する保護的役割がある可能性がある。本講演では、LCニューロンの自己抑制機構破綻が誘引する神経変性機序を紹介し、MTNニューロンの神経活動がLCニューロンの生存に関与する可能性について議論する。

1日目 8月29日(土) 基礎・臨床研究セッション
座長 兼松 隆 (九州大学)

14:00-16:25

招待講演② 14:50-15:35

歯科外来患者における認知機能低下のスクリーニング法の検討

Evaluation of screening methods for cognitive decline in dental outpatients

○柏崎晴彦

○Haruhiko Kashiwazaki

九州大学大学院歯学研究院口腔顎顔面病態学講座高齢者歯科学・全身管理歯科学分野

Section of Geriatric Dentistry and Perioperative Medicine in Dentistry,
Division of Maxillofacial Diagnostic and Surgical Sciences, Faculty of Dental
Science, Kyushu University

近年、認知症と嗅覚障害などの感覚障害との関連が注目されているが、味覚との関連についての研究は少なく、特に口腔機能を考慮した研究はほとんどない。本研究では、高齢歯科外来患者を対象に、認知機能と味覚・口腔機能との関連を明らかにし、認知機能低下のスクリーニング法になり得るか検討した。対象者は65歳から85歳の58名で、5基本味の全口腔法による味覚検査、口腔機能精密検査7項目、日本語版 MoCA を実施し、25点以下を認知機能低下群とした。群間比較には Mann-Whitney test、 χ^2 二乗検定、ROC 解析、Youden 指数、多変量ロジスティック解析を用いた。認知機能低下群は46.6%で、ODK (/ta/, /ka/) の低下とうま味の味覚減退を認めた ($P<0.01$)。「うま味の味覚減退あり」かつ「ODK<5.7回/秒」の組み合わせは、診断的有用性が最も高く(陽性尤度比2.30、特異度71.0%) 多変量解析でも有意な予測因子であった(オッズ比4.727、 $P=0.013$)。本指標は、歯科外来での認知機能低下の早期発見に有用と考えられた。

1日目 8月29日(土) 基礎・臨床研究セッション
座長 兼松 隆 (九州大学)

14:00-16:25

招待講演③ 15:40-16:25

高齢者の口腔常在微生物叢の構成と健康状態との関連

Relationship between oral microbiota composition and health in elderly adults

○竹下 徹

○Toru Takeshita

九州大学大学院歯学研究院 口腔予防医学分野

Section of Preventive and Public Health Dentistry, Faculty of Dental Science,
Kyushu University

消化器および呼吸器の入り口に位置する口腔には膨大な数の微生物が複雑な生態系を構築して生息しており、我々は唾液とともにこれらを飲み込んでいる。近年、特に高齢者においてこうした常時嚥下されている口腔微生物がこれまで考えられてきた以上に下流の臓器に到達していることが明らかとなり、口腔常在微生物叢の全体像とその動態の理解が急がれている。我々は DNA を分析する網羅的微生物群集解析法を駆使した分子疫学的調査を積み重ねることで、口腔微生物叢における常在細菌の構成バランスと誤嚥性肺炎をはじめとする全身疾患との関連、そして微生物構成と歯科保健状態との関わりや加齢に伴う変化等、高齢者の口腔微生物叢の構成に関する様々な知見について報告してきた。本講演ではこうした調査で得られた結果をもとに口腔常在微生物叢というシステムの捉え方について概説する。

1日目 8月29日(土) 認知症セミナー
座長 荻野 洋一郎 (九州大学)

16:30-18:00

認知症セミナー 16:30-18:00

認知症診療の基礎知識と、最新知見について

Fundamentals and recent advances in dementia care

○内田直樹

○Naoki Uchida

医療法人すずらん会たろうクリニック

Medical Corporation Suzuran-kai Taro Clinic

認知症は単一疾患の病名ではなく、生活障害をその本質とする状態である。本講演では、医学モデルに基づき改善可能な認知機能障害を見逃さない視点から、認知症診療の基礎を整理する。

認知機能障害と生活障害の段階的な評価、せん妄をはじめ見逃してはならない可逆性病態の確認、アルツハイマー型・脳血管性・レビー小体型・前頭側頭型の4病型で異なる摂食嚥下障害の現れ方を共有する。

歯科医師は、認知症診療における重要なゲートキーパーとなりうる。

口腔衛生の維持や歯科予約の管理は軽度の認知機能障害の段階から綻び始めることが多く、その変化にいち早く気づきうる立場にあるからである。長期にわたり患者と関わり、家族複数名と接点を持ちうる強みも大きい。在宅医療の現場からの経験を交え、歯科口腔領域の専門家と地域でいかに協働するか、参加者の皆さまで考えたい。

2日目 8月30日(日) 臨床ステップアップセミナー 9:30-10:50
座長 會田 英紀 (北海道医療大学)

講演① 9:30-10:10

認知症患者への歯科訪問診療はなぜ難しいのか

—訪問歯科と認知症, 二重の課題—

Why is home-visit dental care for patients with dementia so difficult? The dual challenge of home visits and dementia

○三輪俊太

○Shunta Miwa

Ihana 訪問歯科グループ, 大阪大学大学院歯学研究科有床義歯補綴学・高齢者歯科学講座

Ihana Home Dental Care Group, Department of Removable Prosthodontics and Gerodontology, Osaka University Graduate School of Dentistry

歯科訪問診療の難しさは、疾患だけでなく患者の生活まで含めて関わりを持つ全人的医療である点にある。生活の場で家族や介護者と共に治療目標を定めるには、問題点の整理に生物・心理・社会（BPS）モデルを、意思決定に共同意思決定（SDM）を用いることが有効である。しかし認知症患者では、この枠組みを用いる中で固有の問題に向き合う必要がある。患者の言葉をどこまでそのまま受け取り、どこまで背後の本音を読み取ろうとするか。代理意思決定者となる家族、施設・病院スタッフの言葉と、本人の言葉とをどう重み付けるか。本音を引き出すために、どのような言葉を意識して発するか。臨床現場ではこれらは個人の資質として片付けられがちだが、会話の組み立て方や「分からなさ」を引き受ける姿勢は、技術として習得すべきものである。本発表では、現場での向き合い方を共有し、訪問歯科医が身につけるべき技術について議論したい。

2日目 8月30日(日) 臨床ステップアップセミナー 9:30-10:50
座長 會田 英紀 (北海道医療大学)

講演② 10:10-10:50

在宅認知症高齢者に対する口腔マネジメントの実際

Practical approach to oral management for home-care elderly with dementia

○中尾 祐

○Yu Nakao

別府歯科医院 訪問診療部

Department of home visiting care, Beppu Dental Clinic

日本では2007年に超高齢社会へ突入し、2040年に向けて高齢者人口はさらに増加すると予測されている。認知症の最大のリスク因子は加齢であり、それゆえ今後は「誰もが認知症になる時代」の到来が予想される。そのような中、歯科には口腔疾患の予防や口腔機能の維持・回復に加え、食支援を通じて生活の質や尊厳を支える役割が求められている。しかし、在宅認知症高齢者への歯科介入では、拒否や理解力の低下、家族・介護者との連携不足などにより、適切な口腔管理や継続的な食支援に難渋することも少なくない。本講演では、在宅認知症高齢者に対する実際の口腔マネジメントについて症例を供覧し、その際に直面する問題点などについてお伝えする。これらを通じて、進展する高齢化社会における歯科の社会的役割について理解を深める機会としたい。

2日目 8月30日(日) 教育講演
座長 鮎川 保則 (九州大学)

11:00-12:10

教育講演 11:00-12:10

認知症予防における食事および歯科・口腔ケアの重要性
：久山町研究の成績を中心に

The importance of diet and oral health care in dementia prevention: findings from the Hisayama Study

○二宮利治

○Toshiharu Ninomiya

九州大学大学院医学研究院衛生・公衆衛生学分野

Department of Epidemiology and Public Health, Graduate School of Medical Sciences, Kyushu University

わが国では、超高齢化に伴い、認知症が重要な医療・社会問題となっている。福岡県久山町では、地域住民を対象とした生活習慣病および認知症の疫学研究（久山町研究）を継続している。認知症のない60～79歳の住民1,006人を17年間追跡した結果、大豆製品、野菜、海藻、乳製品、芋類、果実、魚などを多く摂取する多様性に富んだ食事パターンを有する者では、全認知症の発症リスクが有意に低かった。さらに、認知症のない60歳以上の住民1,566人を5年間追跡した結果、残存歯数が9本以下の者では、20本以上の者と比べて認知症の発症リスクが1.7倍高かった。

これらの成績から、多様な食品をバランスよく摂取する食生活と、それを支える歯の健康を維持するための歯科・口腔ケアが、認知症予防において重要であることが示唆される。本講演では、久山町研究の成績を中心に、認知症予防における食生活と歯科・口腔ケアの重要性について紹介する。

2日目 8月30日(日) 一般口演
座長 熱田 生 (九州大学)

13:30-14:30

一般口演 0-1 13:30-13:45

認知機能低下における唾液中代謝物プロファイルの検討

Salivary metabolite profiles in cognitive decline

○林瑤一郎¹、邱大桓¹、川西範繁¹、眞鍋雄太²、星憲幸³、木本克彦¹

○Yoichiro Hayashi¹, Tahan Chiu¹, Norishige Kawanishi¹, Yuta Manabe², Noriyuki Hoshi³, Katsuhiko Kimoto¹

¹ 神奈川歯科大学歯科補綴学講座クラウンブリッジ補綴学分野

² 神奈川歯科大学臨床先端医学系認知症医科学分野

³ 神奈川歯科大学口腔デジタルサイエンス学分野

¹Department of Fixed Prosthodontics, Kanagawa Dental University

²Department of Advanced Clinical Medicine, Division of Dementia and Geriatric Medicine, Kanagawa Dental University

³Department of Oral Digital Science, Kanagawa Dental University

わが国では、認知症患者の増加に伴い、発症前段階での先制的な予防介入が重要視されている。本研究の目的は、認知症および軽度認知障害 (mild cognitive impairment; MCI) 患者と健常者の唾液代謝物を比較し、唾液を用いた非侵襲的な早期スクリーニングの可能性を検討することである。本学附属病院高齢者内科にて認知症専門医が診断した認知症患者 7 名 (認知症群)、MCI 患者 15 名 (MCI 群)、MoCA-J で認知機能障害を認めない者 10 名 (対照群) を対象とし、安静時および刺激時唾液を採取してメタボローム解析を行った。その結果、安静時・刺激時唾液のいずれにおいても、プトレシン、N-アセチルプトレシン、プロリン、プロピオン酸の 4 代謝物が MCI 群で対照群および認知症群と比較し有意に高値を示した。以上より、これらの唾液中代謝物が MCI の早期スクリーニングにおける有用なバイオマーカーとなる可能性が示唆された。

2日目 8月30日(日) 一般口演
座長 熱田 生 (九州大学)

13:30-14:30

一般口演 0-2 13:45-14:00

抜歯により誘発される認知能低下作用へのオキシトシン投与効果

Effects of intranasal oxytocin administration on tooth extraction-induced cognitive impairment

○関貴良史¹、前芝宗尚¹、後藤 加寿子²、北條朋子¹、都築 尊¹

○Takayoshi Seki¹, Munehisa Maeshiba¹, Kazuko Goto-T², Tomoko Hojo¹, Takashi Tsuzuki¹

¹福岡歯科大学咬合修復学講座有床義歯学分野

¹福岡医療短期大学 歯科衛生学科

¹ Section of Removable Prosthodontics Department of Oral Rehabilitation
Fukuoka Dental College

² Department of Dental Hygienist, Fukuoka College of Health Science

【目的】オキシトシン(OXT)は認知機能低下を改善し、神経炎症を抑制することが報告されている。本研究では、家族性アルツハイマー病モデルマウス(ADマウス)を用い、抜歯に伴う認知機能低下に対するOXTの効果を検討した。

【方法】2、4、6ヶ月齢ADマウスを無処置群、抜歯群、抜歯後OXT経鼻投与群に分け、行動試験で認知機能进行评估した。SIM-A9細胞ではIL-1 β およびOXT投与後の関連分子発現を解析し、ADマウスの血清・海馬でもOXTおよび関連分子进行评估した。

【結果・考察】ADマウスでは加齢に伴いOXTは減少し、関連分子は増加した。IL-1 β で増加した関連分子はOXTで抑制された。抜歯による認知機能低下はOXT経鼻投与で一過性に改善し、海馬ミクログリアを介した作用が示唆された。

2日目 8月30日(日) 一般口演
座長 熱田 生 (九州大学)

13:30-14:30

一般口演 0-3 14:00-14:15

認知症高齢者の認知機能に対するマルチモーダル回想法の効果

The effect of multimodal reminiscence therapy on cognitive function for the elderly with dementia

○吉村 弘^{1,2,3}、櫻又一義⁴、小川 望⁴

○Hiroshi Yoshimura^{1,2,3}, Kazuyoshi Sakuramata⁴, Nozomi Ogawa⁴

¹徳島大学大学院口腔科学研究部

²金沢医科大学生理学

³徳島文理大学神経科学研究所

⁴特別養護老人ホームシオンの丘

¹Tokushima University Graduate School of Oral sciences

²Institute of Physiology, Kanazawa Medical University

³Institute of neuroscience, Tokushima Bunri University

⁴Special Nursing Home-Mount Zion

近年、認知症高齢者は増加の一途をたどっている。そこで香辛料の嗅覚刺激と香辛料が有する体性感覚刺激、関連する音声画像を提示することで、記憶の呼び戻しと意欲を引きだすことが出来るなら、経時的な認知機能の低下を防ぐことができるのではないかと考えた。高齢者施設において認知症高齢者を対象として研究を実施した。音声画像提示装置、嗅覚刺激装置から成る仮想空間多感覚刺激システムを作製し、マルチモーダル回想法を行った。認知機能評価として MMSE、嗅覚の評価としてオープンエッセンスを用いた。その結果、認知機能について、時間経過とともに、あまり変化が無いが、またはわずかな増加傾向を示した。香辛料は匂いに加えて体性感覚刺激作用も有している。香辛料刺激が嗅覚機能の低下を補って効果を発揮した可能性が考えられる。認知症が進行して嗅覚機能が低下していたとしても、香辛料刺激を加えた本プログラムが有効な手段となることが示唆された。

2日目 8月30日(日) 一般口演
座長 熱田 生 (九州大学)

13:30-14:30

一般口演 0-4 14:15-14:30

補綴外来患者の口腔機能と主観的認知機能低下の関係

Association between oral function and subjective cognitive decline in
prosthetic outpatients

○戸澤聖也¹、池田 菜緒²、西 恭宏²

○Tozawa S¹, Ikeda N², Nishi Y²

¹鹿児島大学病院 義歯インプラント科

²鹿児島大学 大学院医歯学総合研究科 口腔顎顔面補綴学分野

¹Department of Removable Prosthodontics and Implant Dentistry, Kagoshima
University Hospital

²Department of Oral and Maxillofacial Prosthodontics, Graduate School of
Medical and Dental Sciences, Kagoshima University

【目的】

本研究では、基本チェックリスト(KCL)の認知機能項目で捉えた主観的認知機能低下(SCD)と口腔機能との関連を検討することを目的とした。

【方法】

2020年2月から2024年7月までに当外来を受診し、本研究に同意した50歳以上の患者326名を対象とした(倫理委員会250134疫)。KCL認知機能領域の3項目のうち1項目以上該当をSCDとした。口腔機能低下症検査とKCLの回答から、各口腔機能検査項目とオーラルフレイル(OF-5)に対する主観的認知機能低下(SCD)の関係について二項ロジスティック回帰分析ならびに重回帰分析で解析を行った。

【結果】

SCD該当者は107名であった。口腔機能検査項目では、聖隷式嚥下質問紙のみが独立してSCD該当の有無と関連した。また、OF-5該当数はSCDと有意な関連を認めたが、口腔機能低下症はSCDと有意な関連を認めなかった。

【考察または結論】

SCDは嚥下関連評価およびオーラルフレイル指標と関連することが示唆された。

2日目 8月30日(日) 特別セミナー
座長 若森 実 (東北大学)

14:40-16:00

講演① 14:40-15:20

認知症と口腔機能の関連において、これまでの何がわかったのか、また、まだ未解決の問題は何なのか。

What have we found so far regarding the relationship between dementia and oral function, and what issues remain unresolved?

○後藤哲哉

○Tetsuya Goto

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科歯科機能形態学分野

Division of Oral Anatomy and Cell Biology, Graduate School of Medical and Dental Sciences Kagoshima University

約10年前から、口腔の健康状態と認知症との関連が臨床研究で示され、特に歯周病と喪失歯数が重要なリスク因子として注目されてきた。そこで、口腔機能の観点から歯周病あるいは抜歯による歯の喪失に着目し、その影響がどのような機序で海馬の神経脱落へとつながるのかを基礎的に検討してきた。さらには、アルツハイマー病(AD)モデルマウスを用いた研究から、歯の喪失や咀嚼機能の変化が三叉神経中脳路核およびその近傍にある青斑核を介して脳機能に影響を及ぼすことが明らかとなってきた。一方、AD発症の中心因子であるアミロイド β の生理学的役割はいまだ解明されておらず、そのことが認知症研究の進展を妨げる一因となっている。今後は、三叉神経中脳路核神経細胞を用いて老化機構とオートファジーとの関連を解明するとともに、ヒトのアミロイドPET・タウPETデータと比較検討することで、認知症の早期診断・予防につながる新たな知見の創出が期待される。

2日目 8月30日(日) 特別セミナー

14:40-16:00

座長 若森 実 (東北大学)

講演② 15:20-16:00

腸内細菌と歯周病菌から考える認知症予防:「細菌-脳」の視点から

Gut and periodontal bacteria in dementia prevention: The “Bacteria-Brain axis”

○佐治直樹

○Naoki Saji

国立長寿医療研究センター

National Center for Geriatrics and Gerontology

腸内細菌と脳機能との関連は「腸脳相関」として注目され、炎症や細菌由来代謝産物を介した認知機能への影響が研究されている。演者は、もの忘れ外来患者を対象に、腸内細菌と認知症・軽度認知障害との関連や、細菌由来代謝産物、脳MRI画像、血液バイオマーカーとの関連を検討してきた。一方で、口腔内、特に歯周病と認知症との関連も古くから注目されている。歯周病菌による炎症が脳に影響する可能性に加え、咀嚼・食べる機能の低下が食生活や腸内細菌叢を変化させる可能性も考えられる。演者らの研究でも、認知機能と歯周病との関連について興味深い知見が得られた。高齢者における口腔ケアの重要性も以前より重要視されている。本講演では、腸内細菌と歯周病菌を「細菌—脳」の視点から捉え、食生活、口腔機能、炎症を含めた認知症予防の可能性について、最新の研究成果とともに概説する。